

86 誌上発表 『かなめいし』の中の身体に関する語

計良 吉則

順天堂大学医学部医史学研究室

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、津波や火災に加えて原発事故により、わが国に甚大な被害をもたらしたことは記憶に新しい。地震の多いわが国には、古来よりそれらの被害を伝える記録が残されており、東大地震研究所編『新収日本地震史料』には当時の記録類が収められている。

この中に寛文2年(1662)の「近江・若狭地震」についての記録があり、この地震を題材にした当時の文学作品がある。『かなめいし』がそれである。『かなめいし』は浅井了意の作とされ、了意はこの地震の際に起きた様子について探訪記事風書き、時に虚構を交えている。「仮名草子」のひとつに数えられ、読み物としてのおもしろさをねらった内容になっている。同書の刊行は翌年の寛文3年(1663)であり、興味対象としてのタイミングを逸していない。

『かなめいし』は当時の一般庶民(町人)からみた、京都での地震災害の様子が記されたものであり、そこで用いられている身体に関する語に注目することは意味がある。当時の悲惨な地震災害において、人々の被害の様子を了意はどのように表現したのであろうか。

初めに、身体の動作や状態を示す表現に関して、地震に遭遇した際の身体の移動や運動に関するものが多く、「逃げ出づる」「逃げおりて」「かけ出で」「走り出で」「もみあふて」「立ち帰る」「ほり出す」などの語がある。感情・精神作用に関するものも多く、「気をうしない」「心をとられて」「おどろきて」「胸をひやし」「泣きさけび」「たましあうろたへて」「恐れもだえ」などがある。また身体の病的状態・障害に関するものが多く、「ふるひわななく」「骨をうち折られ」「疵をかうぶりて」などの語がある。死に関するものは「ひらめになりて死する」「きれぎれになりて死にける」「ちぎれたる屍をとりあつめ」「はや事きれはて」「山くずれて打ち殺され」などがある。

次に、身体の部分や分泌物を表現したものに関して、圧倒的に多い語は身体の中でも四肢であり、特に「手」や「足」が多い。具体的に挙げると「手をすりて」「手をひきて」「手ふるひ」「手をにぎり」「手足をうち折られ」「足なえ」「足よろめきて」「みだれ足になりて」「足を空になし」「足をつまだて」などがみられた。五孔では「目」と「耳」が多く、「目をまはし」「目くらみ」「目に見えたる」「盲目」「耳ばかりを切りて」「耳にも聞きいれず」などがある。全身を表す「身」は、「身は小屋がけの」「その身、さきの世の」「ただならぬ身」のように用いられていた。頭頸部に関するものは、「頭を打ちわられ」「頭をくだき」「首だけつかりて」「首数おびただし」などがあつた。「腹」や「腰」などの体幹部は、「腹をたて」「腹はわきよりさけ」「腰をぬかし」「腰の骨うちそんじて」などがある。内臓に関連する語で「はらわた出で」は内臓(腸)がとび出す意で用いられていた。また「肝」が多くみられるが、肝臓を意味するものでなく「肝をけし」や「肝つぶれ」のように、大いに驚くの意の慣用表現として用いられていた。分泌物等に関する語は「血」や「涙」が目立ち、「血はしりて」「血にまみれ」「血の涙を流して恐れかなしむ」「涙をながす」「涙とともに俵にいれ」などがあつた。

現代のヤブ医者を表す語は、すでに鎌倉時代の仏教説話に「藪医師(やぶくすし)」がみられるが、『かなめいし』では「野夫医師(やぶくすし)」が用いられていた。

『かなめいし』は突如発生した地震に人々が慌てふためき、大怪我をしたり命を失ったりといった悲惨な光景を数多く描写している。それらを表す語は身体の移動や運動に関する語が多く、とくに四肢が多く用いられていた。また感情・精神作用や身体の病的状態に関する語が多く、それらと関連して五孔や頭頸部、体幹部が多く用いられ、中でも「肝」を用いた驚きの表現が繰り返し用いられていることが特徴といえる。